

今年も、都にサーカスがやってきた。

満員のサーカス小屋に、開幕を告げるファンファーレが鳴りひびいた。大王アレキスを招いての、サーカスの初日。ゲートを走り出る馬の衣装も、一段ときらびやかだった。きれいな曲芸で観客を楽しませた馬たちがゲートの中に消え去ると、サーカスの花形、空中ブランコが始まった。

ブランコ乗りたちが空中をまう。二人組、三人組とわざが高まるにつれ、拍手は大きくなった。演技を終えて、高い舞台から手をふるブランコ乗りたちに、観客はおしみない声援を送っていた。そのとき、一人が再びブランコに飛び乗った。

(一体何が始まるのか。)

観客の目は、そのブランコ乗りにくぎ付けになった。

(サムをやつ。あれほど言っておいたのに。)

ゲートの赤いカーテンのすき間から、ピエロは、こみ上げるいかりをこらえながらブランコを見上げていた。

ピエロは、サーカス団の古くからのスターであり、団員たちをまとめるリーダーでもあった。

ブランコ乗りのサムが、ここの団員となったのは、つい半年ほど前のことだった。

花形  
その分際で人気があり、注  
目を集めている人や動物こ  
とから。



他国の大きなサーカス団から招かれたかれは、入団早々からスター気取りで、ピエロの言うことさえ、裏面に聞こうとしなかった。そんなサムの態度に、ピエロはいつも腹を立てていた。

今回のことも、そうだった。

「サム。アレキス様のサーカス見物は、毎年一時間と決まっている。その大切な一時間の中で、今年、出番をもらえたのは、馬の曲芸と空中ブランコ、そして、この私の三つだけなのだ。だから、いつものように一人で目立って、いい気になって、時間を延ばすんじゃないぞ。分かったか。サム。」

「またお説教か。スターが目立って、何が悪いというんだ。ああ、そうか。分かったよ。あんたも大王様の前で目立ちたい、そういうことだろ。」

いつも以上に強い口調でピエロに言い返すのだった。

大歓声の中、サムはブランコを止め、その上でゆっくりと逆立ちを始める。後は、息もつかせぬわざの数々。手を変え品を変えて、観客を楽しませた。サムがブランコの柱を下りたとき、すでに約束の一時間は過ぎようとしていた。大王アレキスの一行は、拍手に送られて予定通りにサーカス小屋を後にした。拍手の音が遠くに聞こえるゲートのおくの通路で、演技を終えてぐったりしているサムと、舞台へ向かうピエロがすれちがった。ピエロは一瞬立ち止まりかけたが、足早にゲートへと走って行った。

ピエロは、いつものような陽気なしぐさで舞台に立った。かれの曲芸はい

つも以上に力が入っているように見えた。

つなわたり。ライオンの火の輪くぐり。アクロバット。サーカスの初日は大盛況で幕を閉じた。しかし、ひかえ室に集まった団員たちの顔に、笑顔はなかった。団員たちは、サムに対するいかりと、ピエロに対する同情で固く口を閉ざしていた。

しばらくして、サムが、机をたたいて立ち上がった。

「なぜ、だまっているんだ！ 言いたいことは分かっているよ。しかし、サーカスは大成功じゃないか。私はこのサーカスのために、夢中になって演技をしたんだ。その私の何が悪いというんだ。」

団員たちは、だれも答えなかった。

(無視されている。)

そう思うと、サムはいつそう腹を立て、いすをけりたおした。

そのとき、部屋の片隅にいたピエロが立って、静かに話し始めた。

「今日、ゲートに向かう通路でサムとすれちがったんだ。演技を終えたばかりのサムを見たのは初めてだった。かたで息をしているサムの顔は、真っ青で、そばにいる私にも気付かないほど、つかれ果てていた。」

(一体、何を言い出すのか。)

サムは、ピエロの横顔をにらんだ。

「そのサムの姿を、私は、今も思い出していたんだ。私も目立ちたかった。最初はサムをブランコから引きずり降りしたいほどくやしかった。でも、カーテンの隙間から見たサムの演技と、終わった後のつかれ果てた姿を、何度も思い出しているうちに、私の心の中からはなぜかサ

ムをにくむ気持ちも、消えてしまったのだ。」

ピエロのおだやかな目が、サムの目を見つめた。ピエロは続けた。

「サムは、カいっぱい頑張っている。だから、観客の心を打つのだということが分かったよ。これから私は、サムを手本に努力していくつもりだ。サムのおかげで、今日はいい演技ができた。でも、サム。このことだけは、君にも分かってほしい。おたがいに、自分だけがスターだという気持ちは、捨てなければならぬと思うんだ。このサーカス団のためにも。」

ピエロの言葉が、うつむいているサムの耳に強く残った。

夜がふけても、団員たちが引き上げていったひかえ室に、サムとピエロの声だけがいつまでも聞こえていた。自分だけがスターだという気持ちを捨てた二人にとって、一緒にいることは、少しもつらくなかった。

いつしか、朝日が二人の顔を照らしていた。

一か月が過ぎ、都でのサーカスも、最終日をむかえた。

ブランコ乗りが空中をまう。その中に加わったピエロが、こっけいなしぐさをして、わざと落下する。観客から大きな笑い拍手。ブランコ乗りとピエロの共演も、今日が最後だった。

全てを終えたひかえ室は、団員たちの明るい笑い声に包まれていた。そこには、大王アレキスから届けられた料理とシャンペンが、所せましと並べられていた。



本編  
とても多くの人が感動した